

# 国 語

( 200点 )  
( 90分 )

## 注 意 事 項

- 1 解答用紙に、正しく記入・マークされていない場合は、採点できないことがあります。
- 2 この問題冊子は、60 ページあります。問題は5問あり、第1問、第2問は「近代以降の文章」、第3問は「実用文」、第4問は「古文」、第5問は「漢文」の問題です。  
なお、大学が指定する特定分野のみを解答する場合でも、試験時間は90分です。
- 3 試験中に問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁及び解答用紙の汚れ等に気付いた場合は、手を高く挙げて監督者に知らせなさい。
- 4 解答は、解答用紙の解答欄にマークしなさい。例えば、10 と表示のある問いに対して③と解答する場合は、次の(例)のように解答番号10の解答欄の③にマークしなさい。

(例)

解答番号	解 答 欄
10	① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨

- 5 問題冊子の余白等は適宜利用してよいが、どのページも切り離してはいけません。
- 6 不正行為について
  - ① 不正行為に対しては厳正に対処します。
  - ② 不正行為に見えるような行為が見受けられた場合は、監督者がカードを用いて注意します。
  - ③ 不正行為を行った場合は、その時点で受験を取りやめさせ退室させます。
- 7 試験終了後、問題冊子は持ち帰りなさい。

第4問 次の【文章Ⅰ】と【文章Ⅱ】はともに、和歌を主軸とした説話である。これらを読んで、後の問い(問1～5)に答えよ。

(配点 45)

【文章Ⅰ】

貫之(注1)が馬(むま)にのりて、和泉(いづみ)の国におはしますなる、蟻通(注2)の明神(みやうじん)の御まへを、暗きに、え知らで通りければ、馬にはかにたふれて死にけり。いかなる事にかと驚き思ひて、火のほかげに見れば、神の鳥居の見えければ、「いかなる神のおはしますぞ」と尋ねければ、「これは、ありどほしの明神と申して、物とがめいみじくせさせ給ふ神なり。もし、乗りながらや通り給へる」と人の言ひければ、「いかにも、くらきに、神おはしますとも知らで、過ぎ侍りにけり。いかがすべき」と、社(注3)の禰宜(ねぎ)を呼びて問へば、その禰宜、ただにはあらぬさまなり。「汝(なんぢ)、我が前(まへ)を馬に乗りながら通る。すべからくは、知らざれば許しつかはすべきなり。しかはあれど、和歌の道をきはめたる人なり。A その道をあらはして過ぎば、馬、さだめて起つことを得むか。これ、明神の御託宣なり」といへり。貫之、たちまち水を浴みて、この歌を詠みて、紙に書きて、御社(注4)の柱におしつけて、挿入りて、とばかりある程に、馬起きて身ぶるひをして、いななきて立てり。禰宜、「許し給ふ」とて、覚めにけりとぞ。

X 雨雲のたちかさなれる夜半なれば神ありとほし思ふべきかは

(「俊頼髓脳」による)

(注) 1 貫之——紀貫之。平安時代の歌人であり歌学者。『古今和歌集』の撰者であり、『土佐日記』の作者。

2 蟻通の明神——蟻通神社。現在の大阪府泉佐野市長滝にある。

3 禰宜——神職。神主の下に位する。

4 おしつけて——捺して。糊をつけてはりつけて。

〔文章Ⅱ〕

中比、<sup>(ア)</sup>なまめきたる女房ありけり。世の中たえだえしかりけるが見めかたち愛敬<sup>あいぎやう</sup>づきたりけるむすめをなんもたりける。十七八ばかりなりければ、これをいかにもしてめやすきさまならせんと思ひける。かなしさのあまりに、<sup>(注1)</sup>B八幡へむすめともに泣く泣く参りて、夜もすがら御前にて、「我が身は今はいかにも候ひなん。このむすめを心やすきさまにて見せさせ給へ」と、数珠<sup>ずす</sup>をすりてうち泣きうち泣き申しけるに、この女、<sup>(注2)</sup>参りつくより、母のひざを枕にして起きもあがらず寝たりければ、<sup>(注3)</sup>暁がたになりて母申すやう、「いかばかり思ひたちて、かなはぬ心にかちより参りつるに、かやうに、よもすがら神もあはれとおぼしめすばかり申し給ふべきに、思ふことなげに寝給へる。」<sup>(イ)</sup>うたてさよ」と、くどきければ、むすめおどろきて、「かなはぬ心地に苦しくて」といひて、

Y 身のうさをなかなかなにと石清水<sup>いししみず</sup>おもふ心はくみてしるらん

とよみたりければ、母も恥づかしくなりて、ものもいはずして下向<sup>げかう</sup>するほどに、七条朱雀<sup>(注2)</sup>の辺にて、世の中にときめき給ふ雲<sup>(注3)</sup>客、桂<sup>(注4)</sup>より遊びて帰り給ふが、このむすめをとりて車に乗せて、やがて北の方にして始終いみじかりけり。大菩薩<sup>だいぼさつ</sup>この歌を納受ありけるにや。

(『古今著聞集』による)

(注) 1 八幡——石清水八幡宮。現在の京都府八幡市にある。

2 七条朱雀——七条大路と朱雀大路との交差するあたり。

3 雲客——公卿や殿上人のこと。

4 桂——現在の京都市西京区の桂川のあたり。花や紅葉の景勝地で、貴族の別荘が多かった。

問1 傍線部(ア)～(ウ)の解釈として最も適当なものを、次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選べ。解答番号は

25

27

(ア) なまめきたる女房

25

- ① 大らかで明るい女房
- ② 誠実で信心深い女房
- ③ 退屈で古めかしい女房
- ④ 艶やかで美しい女房
- ⑤ 神経質で心配性な女房

(イ) うたてさよ

26

- ① 情けなさよ
- ② 愛らしさよ
- ③ ぬかりなさよ
- ④ いかめしさよ
- ⑤ 心地よさよ

(ウ) 世の中にときめき給ふ

27

- ① 世間で注目されていらつしやる
- ② 今を盛りと慢心していらつしやる
- ③ 俗世を楽しんでいらつしやる
- ④ 世間を知り尽くしていらつしやる
- ⑤ 時勢に合って榮えていらつしやる

問2 傍線部A「その道をあらはして過ぎば、馬、さだめて起つことを得むか。」の語句や表現に関する説明として最も適当なもの

のを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 28。

- ① 「その道」は蟻通の明神が禰宜を通じて指し示す神意のことで、貫之はこれに敬意を示す必要がある。
- ② 「あらはして」の「て」は逆接の接続助詞で、貫之の非礼をも神は許す可能性を示している。
- ③ 「過ぎば」の「ば」は動詞「過ぐ」の未然形に接続し、馬が生き返るための仮定条件を表している。
- ④ 「さだめて」は蟻通の明神が貫之の非礼を許す可能性が非常に低く、馬は生き返らないことを含意している。
- ⑤ 「得むか」の「か」には、馬が言う通りに生き返ってくればよいが、という禰宜の願望がこめられている。

問3 和歌X・Yに関する説明として最も適当なものを、次の①～⑥のうちから一つ選べ。解答番号は 29。

- ① 和歌Xの「雨雲の」は「たちかさなれる」の枕詞まくらことばで、「たちかさなれる」を出すために詠まれているだけで、「雨雲の」自体に解釈すべき意味はない。
- ② 和歌Xの「雲」「夜」「神」は縁語で、和歌の意味とは別に、これらの語句により天上を想像させる働きがあり、貫之の神に対する崇敬の念が伝わってくる。
- ③ 和歌Xの「たちかさなれる」の「なれる」は「(重)なれる」と「業なれる」の掛詞かけことばになっていて、和歌を生業なりわいにする貫之のイメージが重ねられている。
- ④ 和歌Yの「身のうさをなかなかなにと」の二句は後に来る語を引き出すための序詞じよことばで、三句目の「石清水」を印象づけるが、この序詞自体に意味はない。
- ⑤ 和歌Yの「いはしみず」は「(なにと)言は(じ)」と「石清水」の掛詞になっていて、「言わないけれど」という語句に「石清水」の語が重なっている。
- ⑥ 和歌Yの上の句には「身／な／い」の語が折句として詠み込まれ、母の「我が身は今はいかにても候ひなん」に対する皮肉交じりの返答になっている。

問4 傍線部B「八幡へむすめとともに泣く泣く参りて」についての説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ

選べ。解答番号は

30。

- ① 運にめぐまれずにいた母が、その不遇のつらさを泣いて神に訴えようと、娘を連れて八幡宮に参詣した。
- ② 不遇な母が、娘をなんとかして幸せな生活を送れるようにしたいと思ひ、八幡宮に祈願するため参詣した。
- ③ 落ちぶれていたが信仰に篤い母は、なんとかして娘に正しい道を歩ませようと願って八幡宮に参詣した。
- ④ 貧しい娘が年ごろになって顔かたちがかわいらしくなり、神にその姿を見せようと母とともに参詣した。
- ⑤ 年ごろの魅力ある娘が、貴人に嫁いで世間に恥ずかしくない境遇になりたいと願ひ、母を連れて参詣した。

問5 次に示すのは、本文について解説した文章である。これを読んで後の(i)・(ii)の問いに答えよ。

『古今和歌集』の仮名序で紀貫之は、和歌の効用をこう書いている。和歌は「人の心を種たねとして」詠まれ、「力も入れずして天地あめつちを動かし目に見えぬ鬼神おにがみをもあはれと思はせ、男女をとこをんなの中をも和らげ、猛き武士たけものぶの心をも慰むる」と。和歌は鬼神の心を動かし、人びとを互いに引き寄せ、争いを鎮める。貫之は和歌の本質をこのように表現し、それがのちにさまざまな説話や歌論に引用され、和歌観の基本となるに至った。

【文章Ⅰ】の蟻通神社と貫之の説話は、もっとも早い時期のかたちを、『貫之集』(貫之の私家集。他撰と見られる)で読める。蟻通の神がいらつしやると知らない貫之が乗馬のまま通ろうとしたところ、神の怒りに触れて馬が死にそうになり、貫之が和歌の奉納をしたところで助かったという話である。細部に異同は見られるものの、基本的な部分は【文章Ⅰ】と共通しているから、『貫之集』がまとめられた十世紀中頃には原型ができていたことがわかる。ここから一世紀以上を経て【文章Ⅰ】の『俊頼髓脳』は成立している(一一二二年頃と見られる)。さらに時代がくたってからも同じ話が謡曲や能、俳文など、さまざまなジャンルで書き継がれ、語り継がれている。この貫之と蟻通神社の伝承は、和歌の効用について人びとが思いを馳せるとき、度々触れてきた説話のひとつなのである。

【文章Ⅰ】と【文章Ⅱ】は、和歌観を共有しているため、話の展開を決定づける因果関係が似ている。【文章Ⅰ】で紀貫之は和歌を奉納し、それを神が認めたことで窮地を脱し、【文章Ⅱ】では、

I。

もう少し展開に即して詳しく見てみよう。【文章Ⅰ】の和歌は、貫之が「詠みて、紙に書き、御社の柱におしつけて、拜入りて」しばらくして馬が息を吹き返し、それを見て禰宜が「神は許し給ふ」と認める。【文章Ⅱ】の和歌は、詠み上げられたあと、母娘が石清水八幡宮から下向していたときに偶然雲客に出会い、娘が「やがて北の方に」なり「始終いみじかりけり」といえる人生を送った。それを見て、「大菩薩、この歌を納受ありけるにや」と語り手が考えている。II。神は姿を現さず、ただ、歌の効用がもたらされるのだ。これが歌の功德というもので、『古今著聞集』は「これ(和歌)によりて神明しめいぶつ仏陀もすて給はず」と書いている。こうした和歌に対する信仰を背景とした説話を「歌徳説話」と呼ぶ。



(i) 空欄 **I** に入る文章として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。解答番号は **31**。

- ① 娘が神意を理解していると言ったことで、娘が幸福になる
- ② 母の真心が歌を通じて表れたことにより、娘が幸福になる
- ③ 娘の歌に心を動かされた神の返礼により、娘が幸福になる
- ④ 母の真心に感じ入った雲客の出現により、娘が幸福になる

(ii) 空欄 **II** に入る文章として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。解答番号は **32**。

- ① どちらも、卓越した和歌が詠み上げられ、それが奉納されることにより、神が詠み手をあわれと思ひ、詠み手に何らかの利益がもたらされる
- ② どちらも、まず和歌が詠み上げられ、そのあと、詠み手が何らかの利益を得ることで、あのととき神は歌を受け入れてくださったのだと知る
- ③ **【文章Ⅰ】**は歌のみごとさによって、**【文章Ⅱ】**は歌に親子の情愛が表現されたことによって、それぞれ詠み手が何らかの利益を受けている
- ④ **【文章Ⅰ】**は蟻通の明神に仕える禰宜が神意を理解し、**【文章Ⅱ】**は説話の語り手が石清水の神意を理解したことで歌の価値が高まっている